

ハザードマップは防災の第一歩

地域での防災の取り組み ～事例発表～

事例発表①

将来は地域の防災を担う人材に

託麻原小学校PTA会長 漆野和也さん



最初の事例は、託麻原小(中央区)で7月21日・22日の2日間にわたって行われた「防災キャンプ」について、同小PTA会長で現役消防士でもある漆野和也さんが発表しました。

キャンプは、小学校の教室やプールを使って行い、5～6年生43人が参加しました。目的は、「防災の知識や情報を学び、子どもたちが自分で身を守るようになること」「集団生活を通して自助・互助の大切さを知り、将来の地域防災を担う人材の育成の2つです」。

はじめに、児童一人に2リットルの水を配布。これは、私たちが1日に必要とする水が2～3リットルといわれているからです。その後は、心肺蘇生法

をはじめ、AEDの取り扱い、応急処置の作成、着衣水泳、災害図上学習(DIG)、非常食の調理など、実践的な防災知識を伝えました。

子どもたちの成長が大人たちの刺激になれば

2日目はラジオ体操でスタート。朝食後に、水消火器の取り扱い、地震車体験、緊急車両の展示などを行いました。子どもたちからは、「大人に言われなくても自分で考えて行動できるようにになりたい」「助けられる人から助けられる人になりたい」など、頼もしい感想が聞かれました。こうした子どもたちの成長を見て、大人の防災意識も上げられればいいですね。

事例発表②

「想定」を捨てて、非常時の備えを

熊本市消防局(豊徳校区)第15分団 山内要さん



タレント活動の傍ら、地元・豊徳校区の消防団員という顔も持つ山内要さん。熊本地震の際に避難所運営に携わった経験を基に、3つのアドバイスをくれました。

自分の目で確認してより実用的なハザードマップを

まずは、「自己完結できる備え」が大事です。自宅が被災を免れた場合、非常時の備えがあれば避難所に行かずに済みます。もし自宅を過ごす際は、3日分の食料に加え、お菓子やアルコール、たばこといった嗜好品(嗜好品も準備しておくこと)を用意し、嗜好品を愛しむ時間があるようにと日常を取り戻すことができ、不安軽減にもつながります。

次に簡易トイレです。非常時でも排泄は不可欠。災害で断水な

どが起こると、排泄物の処理もままならず不衛生になりがちです。そんなとき、市販の簡易トイレがあると役立ちます。

最後は、日頃から安全な場所を探し、避難所を2つ決めておくこと。万一、家族がバラバラになっても、「どちらかにいる」と安心できず不安も和らぎます。

非常時にはたくさんの想定外のことが起こります。地域を自分の目で確認し、より実用的なハザードマップを作っておくことが、災害時の不安解消につながります。



写真を使って、キャンプの様子を分かりやすく説明する漆野和也さん



おもしろいPTA主催の防災キャンプの事例発表に熱心な聴き手漆野和也さん



実際に書く山内さんの発表やアドバイスを聞きながらメモを取る参加者

フリーディスカッション

熊本地震の経験生かし「深み」のあるハザードマップを

「忘れない」「避けたい」...課題も多い
地震後の防災意識

フリーディスカッションではまず、熊本地震から2年半が経過し、市民の防災意識がどう変化しているのかについて意見が交わされました。課題として挙げられたのは、「地震の記憶を忘れない」「避けたい」と考える方々への防災意識の植え付け(山内さん)や、「仕事や家庭が忙しい30～40代の防災意識を高める必要性(漆野さん)など。

地域の実情に即したハザードマップが自助・共助につながる

地域の防災意識を高める上で大切なこととして漆野さんが強調したのは、日頃からの「つながりづくり」。「災害に強い地域は行事などを通じて顔見知りが多く、非常時も連携が取りやすい」と説明しました。一方で、都市部や市街地では一人暮らしが増え、そうした連携が難しい地域もあります。山内さんが暮らす豊徳校区でも、地震発生後の避難誘導の際、独居の高齢者の中には「避難所へは行かず自宅に残る」という人も少なくなかったとか。

続けて話題は、ハザードマップ作りに移りました。「行政が作成する一般的なハザードマップは、洪水や土砂災害などの際の危険箇所を示した幾学的なもの。熊本市では、町内自治体単位でのハザードマップ作成を進めています。地域で生かすには、より地域に即した目線で作ることが大事」と漆野さん。水野さんも、「大きな災害を経験している私たちだからこそ、さまざまな災害や状況を想定した深みのあるハザードマップが作れるのでは」と、参加者に呼びかけました。



予定の時間をオーバーするほど白熱したフリーディスカッション。3人それぞれの思いが参加者の防災意識向上につながりました

フリーディスカッションのポイント!

忙しい30～40代の防災意識を高める必要性

「あんな大きな地震はもう来ない」は思い込み

防災の担い手として、子どもとも連携を災害の経験を基にオリジナルのハザードマップ作りを